

文化審議会国語分科会日本語教育小委員会  
「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループ（第5回）議事録

令和4年1月28日（金）  
15時00分～17時00分  
WEB会議

〔出席者〕

（委員）オーリ委員、金委員、佐藤委員、島田委員、竹田委員、平山委員、真嶋委員、松岡委員  
（計8名）  
（文化庁）津田地域日本語教育推進室長補佐、増田日本語教育調査官、北村日本語教育専門職、  
松井日本語教育専門職、ほか関係官

〔配布資料〕

資料1 「日本語教育の参照枠」の活用のためのワーキンググループ（第4回）議事録（案）  
資料2 「日本語教育の参照枠」の活用のための手引（案）  
資料3 「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて  
資料4 「日本語教育の参照枠」の広報素材について

〔参考資料〕

参考資料1 「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループの進め方

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認があった。
- 2 事務局から、議事（1）について、資料2「日本語教育の参照枠」の活用のための手引（案）の説明があり、意見交換を行った。
- 3 事務局から、議事（1）について、資料3「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて、の説明があり、意見交換を行った。
- 4 事務局から、議事（1）について、資料4「日本語教育の参照枠」の広報素材について、の説明があり、意見交換を行った。
- 5 審議の内容は以下のとおりである。

○真嶋座長

それでは、定刻となりましたので、第5回「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループを開会したいと思います。本日はワーキンググループの最終回となります。これまで検討を進めてまいりました「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引」の内容を確定してまいりたいと思います。委員の皆様様の積極的な御審議をお願いいたします。

なお、本日は、所用のため、16時をめぐりに退席させていただきたいと思います。御迷惑をおかけいたしますが、後半の審議の進行は事務局をお願いしたいと思います。申し訳ございませんが、御協力よろしくをお願いいたします。

それでは、会議に際して、注意事項を御説明申し上げます。本日も遠隔による審議となります。円滑な進行の観点から、御発言いただく際にはお名前をおっしゃってから御発言いただくようお願いいたします。事務局側のカメラは定点設置となっており、発言者の顔が映らない場合がございます。傍聴者の皆様におかれましても御理解をよろしくお願いいたします。

それでは、審議に入りたいと思います。まず、事務局より、定足数と配布資料の確認をお願いいたします。

## ○松井日本語教育専門職

事務局より、定足数と配布資料の確認をいたします。本日、全ての委員の先生方に御出席いただいておりますが、金委員のみ所用のため、16時頃の参加となります。

次に、配布資料の確認をいたします。配布資料1「『日本語教育の参照枠』の活用のためのワーキンググループ(第4回)議事録(案)」です。配布資料2「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引(案)」です。配布資料3「『日本語教育の参照枠』の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて」です。配布資料4は「日本語教育の参照枠」の広報素材についてです。参考資料は「『日本語教育の参照枠』の活用に関するワーキンググループの進め方」となっております。以上です。

## ○真嶋座長

ありがとうございます。それでは、まず議事録の確認に入りたいと思います。配布資料1、議事録(案)につきましては、内容を御確認いただき、修正の必要がある箇所がありましたら、本日より1週間をめどに事務局までお知らせいただければと思います。

なお、最終的な議事録の確定につきましては座長一任とさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。それでは、議事1、「日本語教育の参照枠」の活用に向けてです。配布資料2を御覧ください。この「手引」については、執筆に御協力いただきました委員の皆様方、お忙しい中、ありがとうございます。まず、事務局より、配布資料2「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引(案)」について、前回からの修正点が多々あるかと思っておりますので、そちらを中心に御説明をお願いいたします。

## ○松井日本語教育専門職

事務局より、配布資料2について説明をいたします。前回の11月のワーキンググループでの審議を経て、まず大きな変更点といたしましては、「手引」の構成が2章構成から3章構成に変わっております。第1章は「日本語教育の参照枠」の説明、第2章は「C a n d oをベースにしたカリキュラム開発の方法」の部分を1章として独立させまして、第2章としております。第3章は「C a n d oをベースにしたカリキュラムの事例」ということで、三つの類型で、執筆いただいたとおりの事例を示しています。

第2章、第3章の個別の変更点につきましてはこの後、委員の先生方から御説明を頂きたいと思いますが、私の方からは第1章の加筆点のみ確認をさせていただきたいと思います。第1章につきましては、一問一答式で参照枠の内容を分かりやすく説明するというところで、質問の数等の変更等はございません。ただし、コラムに関しまして、16ページ、17ページに、「コラム4 C E F Rを参照している各国の事例」として、新たにドイツと韓国での活用の事例を追加させていただいております。この点が第1章の大きな加筆点でございます。それ以外は、細かい字句の調整はありましたが、おおむね前回のものを踏襲した内容となっております。事務局からは以上です。

## ○真嶋座長

ありがとうございます。今日の進め方ですが、第2章、第3章と審議を進めていきたいと思いますが、第2章につきましては、執筆してくださった金委員が16時頃の参加ということになりますので、先に第3章の各部分を御執筆いただいた3名の委員の先生方より、前回の原稿からの修正点について説明を受けて、その後、第1章と第3章を続いて審議していきたいと思っております。では、佐藤委員、竹田委員、平山委員の順番で、新しく加筆していただいた部分を中心に御説明をお願いいたします。

## ○佐藤委員

島根大学の佐藤です。よろしくお祈いします。新たに加筆した部分については3点あります。

一つ目は、カリキュラム開発の目的や背景部分に関しての記述を充実させたものとなりました。具体的な県の方針やカリキュラムの目的の部分等について、加筆しました。二点目は、「日本語教育の参照枠」と重なる箇所について、よりはっきりと分かる形で記述をいたしました。三点目は、バックワード・デザインに基づいたカリキュラム開発の流れについても、具体的な事例として活用いただけるように詳しく書く形にいたしました。今述べた三つが主な改善点と修正した部分となります。

### ○真嶋座長

ありがとうございます。続きまして、竹田委員からお願いいたします。

### ○竹田委員

コミュニカの竹田です。留学のカリキュラムについては、大きな変更というのはございませんが、とても小さいことですが、51ページの表1の中に「A0」というのがあったのを「Pre A1」と変更したり、鮮明でない図表を入れ換えたりということをいたしました。

それから、同じ表1の下に、3か月ごとにステップが上がっていくのですが、それがCEFRの通常的能力記述のレベルの区分ではなく、B1を更に3つに、B2を3つにするような形での分け方にしておりますので、そのことについての断り書きを入れました。

あとは、52ページの表が若干不鮮明であったのを、内容は全く変えずに鮮明なものに差し替えました。それから、55ページ、56ページの表が少し崩れておりましたのは差し替えていただいて、修正されております。さらに、最後にまとめを加えたというところで、大きな変更はございません。

### ○真嶋座長

どうもありがとうございます。それでは、平山委員、お願いいたします。

### ○平山委員

JICEの平山です。よろしくお願いいたします。就労事例につきましては、前回の原稿では文字がずっと続いている状態でしたので、各ページを箇条書にしたり、表にしたりという形で書き換えています。中身の大筋はほとんど同じですが、読みやすさに注意して、形を少し変えました。

全体としてはそういう感じで、前回10ページでしたが、5ページ内容を増やしました。後半の資料のサンプルですが、前はカリキュラムについては、レベル1だけ載せていたのですが、レベル2、レベル3、全てのコースのシラバス、カリキュラムを加えました。

最終ページの「ポートフォリオ評価のヒントとなる活動例」の部分も内容を差し替えました。キャリアプランを作成するというページにしたのですが、ここはキャリアプランを作成するまでの自分の価値観、これまでの職歴、学歴を振り返るという活動の後にキャリアプランを作るということで、このキャリアプランのページを書く際に、又過去のことを振り返ってキャリアプランを書いてみて、書けないところはもう一回前に戻って考え直すというような、ポートフォリオの機能をできるだけ活用できるようなパートを書き換えたような形で、差し替えを行いました。内容の大筋は前回からほとんど変わっていませんが、さらにまとめを加えたというところが変更点になります。

### ○真嶋座長

委員の皆様には、短時間で読みやすさを優先して書き加えていただきまして、どうもありがとうございました。分かりやすくなったのではないかと考えております。それでは、委員の皆様より御意見を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。最初の方からでも、お気づきの点、何かありましたら忌憚なくお願いいたします。

先ほど事務局からありましたが、第1章についてはコラムを加筆していただいて、ドイツと韓国の様子を手短に紹介していただきました。短いものではありますが、分かりやすい内容ではないかと思いますが、何かありますでしょうか。加筆いただいた松岡委員、何かありますでしょうか。

### ○松岡委員

このコラムがどういう役に立つのかというのが少し分かりにくいと思いつつ書きました。ですので、読み手がどのように読むのかという点は少し気になるころではあります。

### ○真嶋座長

日本列島内に籠もらないでほかの国にも目が行くのはいいことだと思っておりますので、よい内容かと思

います。しかも、ヨーロッパ、アジア、韓国と分かれていて、その点についてもよいと思いました。

第1章で特段なければ、次に第3章の三つの事例ですが、非常に具体的で、三つがそれぞれ違うということがよく分かる、読者に分かりやすい書き方をさせていただいていると思うのですが、何かお気付きの点がありますでしょうか。

#### ○松岡委員

致し方ないと思いますが、第3章の各事例のところに参照枠の表がありますが、文字が小さ過ぎて、判読不能だろうというのが気になっています。この示し方について、もう少し見やすくなるとよいと思います。

#### ○真嶋座長

これについて事務局から何かありますか。

#### ○松井日本語教育専門職

御指摘のとおり、これはほぼ読めないものになっておりますので、82ページの参考資料のところで「言語活動別の熟達度」を別添で示しています。参考資料の方もまだ字が不鮮明ですので、工夫したいと思います。そこで、例えば33ページにあります図のところの表については、文字は要らなくて、枠だけを示してもいいかもしれません。

#### ○真嶋座長

事務局の方で御提案くださったように、場所だけ、今ここの話をしているということが分かるように示していただけたらと思います。松岡委員の御指摘のとおり、工夫があるといいかもしれません。

ほかにかがでしょうか。生活、留学、就労の具体的な事例についてはこのような形でよろしいでしょうか。何かお気付きの点、ありますか。

#### ○島田委員

今日の資料を拝見して、前半と後半がしっかりリンクもされていますし、あと、コースデザインのところもバックワード・デザインに特化した形で、Can doをどういうふうにご利用すればいいかということでも軸が一本定まっているので、すごく読みやすくなりました。後半の部分の例示もすごく参照しやすいと思います。

先ほど、それぞれの事例の表紙ページのレベルの字が小さいというお話でしたが、結果的に、C1、C2の事例というのはないので、C1、C2を上を上げて、A1からB2をもう少し大きくする形で示してもいいのかなと思います。あるいは、表は表として置いておいて、ポップアップでレベルのところを幾つか例示として見えるようにしてはどうでしょうか。全く文字がなくなってしまうと、理解しにくくなるかもしれないので、何か工夫ができないかと思います。

#### ○真嶋座長

ありがとうございます。事務局で島田委員からの御意見を反映したような形で工夫していただけますでしょうか。

#### ○オーリ委員

資料に目を通しましたが、とても分かりやすく、使いやすい「手引」ができたなと思っていて、事務局をはじめ、委員の先生方のおかげだと思います。ここに参加しているのは、一人の外国人として参加しているわけで、日本語教育を受けてきた身でもあり、学習者として大体これを見ていたので、今、この「手引」を手にとると、これからの日本語教育が楽しみになってくるというか、どういふふう発展していくのかなと非常に楽しみになってきます。

なぜかという、特に大枠、もちろんそれぞれの事例というのが大切で、その中に含まれている大枠に

も書いてある理念がそれぞれの事例にも反映されているので、すごくよいと思います。個人的には20年以上前、初めて日本語に触れたときは、今ここで読んでいるこういう理念はそのときはなかったと思います。その理念というのは、例えば、私はここでは生活者の一人として住んでいるわけで、自分が社会的な存在として学習者を捉えるという、すごく大切なことですが、以前の言葉の教育というのはそのようになっていなかったというふうに覚えています。ですので、このような理念が盛り込まれたということだけでも大変意義のある「手引」になったのではないかと考えています。

#### ○真嶋座長

一学習者、経験者のコメントとしても、この「手引」の内容について力づけていただいたというか、うれしいコメントでした。これが一般の皆様にも広く受け入れられて、そういう理念が浸透していくことが、今後の、楽しみというふうにオーリ委員は言ってくださいましたが、私も楽しみです。ありがとうございます。

#### ○竹田委員

すみません、1点よろしいでしょうか。修正した部分が本日の資料に反映されていないところを、今、気が付きました。51ページの、先ほど「CEFRの通常的能力記述のレベルの区分ではなく、B1を更に3つに、B2を3つにするような形での分け方にしております」と説明し、この部分を加筆したと言いましたが、反映されていないようですので、加えていただければと思います。

#### ○真嶋座長

この部分はCEFRの方でも教育現場の必要性に応じて手を加えてもらってよいというふうなことを言っているので、コミュニカ学院の現場ではこうするのが適当だと考えて、実践されている事例だということが読み手に分かっていただけたらいいということでしょうか。

#### ○竹田委員

はい、しかし、どうしてこれは3レベルなのだろうと思われる読者の方もいらっしゃるでしょうから、この部分については断っておきたかったというところです。

#### ○真嶋座長

コミュニカ学院さんの事例は、CEFRというのは柔軟な使い方をすればよいということを示唆することもできるので、重要な点かと思います。ありがとうございます。

ほかに何かありますでしょうか。ないようでしたら、配布資料3と4に入りたいと思います。配布資料3「『日本語教育の参照枠』の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて」、配布資料4「日本語教育の参照枠」の広報素材についてです。この点、事務局から御説明をお願いします。

#### ○松井日本語教育専門職

では、配布資料3「『日本語教育の参照枠』の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについて」、配布資料4「『日本語教育の参照枠』の広報素材について」を説明いたします。配布資料3につきましては、「日本語教育の参照枠」の指標に基づく日本語能力の自己評価ツールについてです。

こちらは、日本語学習者が自分のよく分かる言語で自分の日本語能力を簡易に把握できるものとして、本ワーキンググループで審議を進めていただいたところですが、本日御覧いただきたいのは主に資料の2枚目です。スマートフォンでこういうようなものを示して、自分でCan doをチェックすることで、今、日本語でどんなことができるかということについて、確認できる仕組みを考えているところです。これは日本語を含めて14言語での開発を予定しております。

資料の左上のところですが、「日本語教育の参照枠」の五つの言語活動ごとに、「聞くこと」、「読むこと」というふうに示されておりますが、ここをタッチパネルで押していただくと、「聞くこと」や「書くこと」のCan doがA1から順番に示されまして、順番にチェックをしていくと、あなたの力はB

1ですよ、B1ではこんなことができますよというようなことを14言語で示せるような簡易な仕組みを想定しているところです。ただし、様々な方が自己評価をしていただきますので、いきなりB1ですと言われても何のことやらというところがありますので、少し説明書きが必要であろうというところで、上の右側の「チェック！する前に」というところにCEFRを参考とした「日本語教育の参照枠」というものがあって、全体的な尺度という6個のレベルで日本語を評価しますということ、さらに、五つの言語活動を全部できることはなくて、できるものから伸ばしていったらいいというところをここに書き込みたいと思います。

全体的な尺度については全て表示すると文字数が多いので、抜粋した形で示し、6段階でチェックするのだというのを分かっていただいた上で言語活動ごとの自己評価をできたらというふうに考えております。「チェック！した言語活動のまとめ」というところですが、「日本語教育の参照枠」の本冊では五角形のレーダーチャートで言語能力を示していますが、レーダーチャートというのはなるべくバランスのいい形がよいというイメージがありまして、欠けたところを意識して埋めていこうというような感じで使われるものかと思います。そういったある意味ミスリードみたいなものに注意して、五角形のレーダーチャートではなく棒グラフで凸凹しているところ、それはそのままよいのだということを含めて、このような結果の示し方をしてはどうかと考えております。その下に、自分がチェックを入れたCan doの一覧が出てきて、できたのはこれ、できないのはこれ、というように自分の日本語の能力を振り返っていただければなと思っております。

なお、このツールの名称ですが、「にほんごチェック！」という名前で、まだこれは確定ではございません。委員の皆様から幾つかお名前の案を頂いておりますが、これは14言語に翻訳をかけますので、翻訳にかけたときにどういう表示になるか、あと、略語を使った名称というのも、略語自体が英語だと、それをどのように示していくのかなど翻訳するに当たって難しい問題がございますので、名前については、今後、委員の皆様からメール等で適宜御相談に乗っていただきながら考えていきたいと思っております。

続きまして、配布資料4の説明です。こちらに関しましては、「日本語教育の参照枠」を、広く一般の方になるべく分かりやすく理解してもらえるような広報素材を作ってはどうかということで準備を進めているものです。A4で4ページ、見開きのパンフレットのようなものを想定しています。1ページ目は、なぜこういうものができたかという、「取りまとめの背景」です。在留外国人数などの数字を挙げて、世界地図で、なるべく日本語教育の広がりというものを示した上で、多様な文化を尊重した活力のある共生社会の実現に寄与することを目的として取りまとめられたという経緯の部分を説明しているページです。

2ページ目は、「日本語教育の参照枠」のエッセンスの部分に当たるのですが、この辺りは非常に文字が多くて、レジメのような形にはなっております。この点については後ほど御意見を頂きたいところです。2ページ目の下は、「日本語教育の参照枠」の言語教育観の三つの柱についてです。3ページ目は全体的な尺度です。六つのレベルについての言及があります。最後の4ページ目は、「日本語教育の参照枠」における日本語の熟達度で、主にCan doについての説明です。Can doというものがお互いの歩み寄りによってコミュニケーションが成り立っていくというようなところに注目して、Can doの具体例を示しているのが4ページ目になります。

以上が配布資料3、配布資料4の説明です。委員の皆様方から御意見を頂けたらと思います。事務局からの説明は以上です。

## ○真嶋座長

ありがとうございます。金委員が出席くださいました。金委員の加筆箇所については、後で説明をお願いしたいと思います。

先に進んでおりますので、配布資料3と配布資料4について事務局から御説明があった点について御質問や御意見はありますか。

## ○島田委員

アプリのキャラクターである文化庁の「ぶんちゃん」はとてもいいと思いますが、気になったのは色に

ついてです。「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」について、一旦この資料で示された色を使い始めると、将来にわたってこの色が意味を持つようなことにもなるので、この色は、何かベースになるものがあるのでしょうか。

#### ○松井日本語教育専門職

「日本語教育の参照枠」では、JF日本語教育スタンダードのレベルの色を共通して使っており、その六つのレベルの色と五つの言語活動の色が一部同じになっています。暫定的にアプリのイメージをつかむために、便宜上、このようなになっていますが、色遣いについては全体的なデザインとの関係で今後調整をしていきたいと思っています。

#### ○島田委員

JF日本語教育スタンダードの色がベースにある中で、今回これを決めてしまうと恐らく何かの意味を持つことになりかと思えます。日本語教育だけでなく、既にあるもの、文化庁や文科省で使っているものがあるとしたら、そういう色も参考にされるといいのかなと思いました。

#### ○真嶋座長

御指摘のとおりだと思います。はっきり記憶していませんが、ドイツ語のマニュアルにも色別があったような気がしますので、見てみたいと思います。ほかに何か御指摘の点はありますでしょうか。

#### ○佐藤委員

このツールの利用方法として、自己評価を記録して、又再度振り返って見ることができるという機能が付くというお話だったのでしょうか。

#### ○松井日本語教育専門職

理想的には、個人のアカウントを作って自分が評価した結果をセーブし、時間を追って成長ができるような、一種のeポートフォリオみたいなものに発展できるというなどは考えております。ただ、現時点では、そういうセーブする機能等々をつけるとシステムが複雑になりますため、まずはそういうセーブ機能がない、一種の選択式で自己評価できるという非常に簡易なものからスタートしていきたいと思っています。

その中で、恐らくそういう要望というのは上がってくるとは思いますので、その段階でこれをどう発展していくかというところを考えていきたいと思っています。計画に関しましては、今年度の中に名称やシステム、デザインを固めまして、具体的にシステムを開発していくのは来年度、そして世に公開するのは来年度中ということで進めていきたいと思っています。ですので、学習者を記録できる機能というのは少なくとも開発の第1期に関しましては想定していないというのがお答えになります。

#### ○佐藤委員

もう1点ですが、実際に日本語学習者の方が自己評価をした結果を、特定の他者、例えば教育機関ですとか日本語学習支援者の方と共有できるようなリンクを送ったり、結果をPDFで送ったり、そういった機能がもしできればいいと思うのですが、そういったものも検討いただければと思います。

#### ○真嶋座長

ありがとうございます。そういう発展性が将来的にはいろいろ考えられると思います。

#### ○松岡委員

配布資料4は、外国人の数値等が入っていますが、これは毎年改訂していく予定で作られているのか、教えてください。

#### ○松井日本語教育専門職

基本的には改訂はする予定はございませんが、再印刷をかけるという段階で、そのときに数字が新しいものがあれば、そういうときに適宜データの部分は更新して配布してことを想定しております。

## ○松岡委員

ここにあってこのような数値を出さなくてもいいのかなというふうに感じています。日本語学習者が増えており、継続的な学習を整える必要があるということが分かればいいことですので、あまり数字を出さなくてもいいのかなという印象を持ったところです。

あとは、やはりレジュメのような印象を持ちましたので、できるだけ文章ではない形で、視覚的にすぐに分かる方がパンフレットとしての意味合いが果たせるのかなというふうに感じました。

## ○真嶋座長

事務局から印刷、増刷という話も出ました。これは紙でも入手ができるようにするのはいいと思います。ネットダウンロードして御覧になるという場合も多いと思うので、松岡委員のおっしゃったように、数字を出すとだんだん古くなっていくので、確かにどうかと思いました。

ほかにありますでしょうか。配布資料4については、このように見せていただけると、世界地図など、視覚的に訴えるものがあると分かりやすくよいと思いました。

もしないようでしたら、金委員が御入席ですので、話を戻したいと思います。配布資料3、配布資料4につきましてはよろしいでしょうか。もしほかにありましたら、メールで頂けたらと思います。

それでは、配布資料2の第2章を加筆いただいた金委員から御説明お願いいたします。

## ○金委員

遅れまして申し訳ございませんでした。私が担当させていただきました第2章の方について御説明させていただきます。まず、この章は、「1」のコースデザインと「2」の評価、この二つの柱で構成されています。前回は、「1」のコースデザインの(2)の概説のところ長い、本論に入るのに整理が必要ではないかというアドバイスを頂きました。そのアドバイスを受けまして、コースデザインの全体の3段階というふうに、3つの段階があるというところに留めまして、その中で実行・評価のところバックワード・デザイン、実際に参照枠を活用して行えることというふうにいたしました。

それから、具体的にカリキュラムデザインのバックワード・デザインの中では、参照枠のC a n d oを用いてどのように設計に役立てていくかということを説明する節でございますが、こちらの中で用いたC a n d oを「日本語教育の参照枠」のC a n d oの番号に照合させ、例示ができるような形で修正いたしました。

それから、大きなところでもう一つは後半の評価のところですが、パフォーマンス評価(ループリックの作成)の手順というところが文章による説明が中心になっているということでしたので、視覚的に整理をして、手順が一目で分かるような形にして、C a n d oを取り出して枠に入れることによって、例示したものがより伝わるように修正いたしました。

それから、パフォーマンス課題として例を挙げているのですが、具体的な成果、このように作成することができますということで、26ページに具体的な記述を入れ込んだ形で例示をさせていただきました。

最後に、ポートフォリオ評価の後に、このような評価を試みることを理由というところを理念と結びつけて解説を入れてはどうかというアドバイスを頂きました。それにつきましては、29ページの「ここまで、」という部分で、それまでの節のまとめをすると同時に、この「手引」としては、実際に教室を出ても自律的な学習者として生活する、学校や職場で日本語を使って社会に参加するために何が必要か、ということをサポートするという立場でカリキュラム作成を考えているということをもとめとして加筆させていただきました。

以上が主に修正を加えたところでございます。

## ○真嶋座長

短時間で具体的に分かりやすく終始一貫した形で書いていただきました。島田委員からもお褒めを頂い

ておりました。今の御説明を受けて、第2章につきまして御質問や御意見はありますでしょうか。

このルーブリックの具体例も非常に分かりやすいですが、韓国の生徒さんの事例については、実際にあったものですか。

#### ○金委員

はい。実際にあったものを挙げております。実際に韓国で日本語を教える先生方から頂いたものをベースに作成しております。「日本語教育の参照枠」はもちろん国内の様々なところで使っていただきたいということがありと理解していますが、最後の配布資料4にもありますように、国内に限らず、日本語を使う現場に広く参照していただきたいという趣旨とも少しでもつながるといいなという期待も込めて、このような形を取りました。

#### ○真嶋座長

この「手引」の後で出てくる生活、留学、就労のどれとも少し異なり、現場も違うので、違ったタイプの例として、具体的で分かりやすく、想像しやすいよい例を挙げていただいたと思いました。

ほかの委員の皆様、いかがでしょうか。第2章を独立させて書いていただいて、しかもコースデザインについて、バックワード・デザインに特化してといたしますか、集中して、分かりやすく書いていただいたので、とても読みやすいと思います。また、その後とのつながりもよいと思います。

#### ○金委員

アドバイスをとても詳しく、また、多大なサポートを頂きましてできましたこと、ここでもう一度お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

#### ○真嶋座長

ほかに特にならなければ、これで本日の審議事項としてはカバーできたかと思いますが、事務局、何かフォローはありますか。

#### ○松井日本語教育専門職

審議事項については全て御検討いただけたかと思います。

#### ○真嶋座長

では、今日の審議事項はここまでとして、この後も、修正点やお気づきになった点がありましたら、メールで事務局の方に御一報いただければと思います。

最後に一言申し上げます。「日本語教育の参照枠」については、日本で初めてこういうものができて、その「手引」ということで、このワーキンググループに関わらせていただいて、1年を振り返って、あっという間でしたが、非常に楽しく、生活、留学、就労、特に生活と就労については知らないことが多かったので、すごく勉強になりました。また、委員の皆様の御意見をたくさん聞かせていただいて、いい経験をさせていただきました。座長としては、皆様の御協力に本当に感謝いたしております。先ほど前半の方での話にもありましたが、これが世に出て、日本語教育にあまり関わりのなかった方にも、面白そうだな、もっとやりたいなと思ったり、そんなに敷居の高いものでもなさそうだななど、この「手引」を見てそういうふうになってもらったり、広く外国人に、外国ルーツの方々との共生のために、あまり肩肘を張らないで自分のできることをそれぞれの場所でやっていただけるような、そのための道具になったら非常にうれしいなと思っています。

拙い司会でしたが、皆様、御協力いただき、どうもありがとうございました。所用がありますので、申し訳ありませんが、これで退出させていただきます。1年間、どうもありがとうございました。あとは事務局の方をお願いいたします。失礼します。

#### ○松井日本語教育専門職

真嶋座長、ありがとうございます。引き続き、進行と言ってもほとんどございませんが、事務局の方で進めていきたいと思っております。

続きまして、最後に委員の皆様から一言ずつ御挨拶いただきたいと思っております。まず、松岡委員からよろしくをお願いいたします。

#### ○松岡委員

皆様、1年間お疲れさまでございました。「手引」ができたならこれで終わりではなく、ここから利用に努めていきたいと思っておりますので、引き続きよろしくをお願いいたします。

#### ○島田委員

委員の皆様、協力者の皆様、事務局の皆様、1年間ありがとうございます。私は会議に参加するだけということで、本当に皆様の努力と申しますか、これまでの実践がこういう見える形になって、又それが未来を作っていくというところに立ち会えて、よい場に参加させていただけたと思っています。

バックワード・デザインというのがスタンダードになるのだということなのかなということを感じて、私もオーリ委員と同じですが、わくわくする感じで今日の会議を終われるかと思っております。本当に皆様ありがとうございました。

#### ○オーリ委員

ありがとうございます。私も、まずは皆様に感謝を述べたいと思っています。事務局をはじめ、委員の皆様、協力者の皆様、本当にありがとうございます。実は私は英語教育に携わっているのですが、今、日本の英語教育でも特に大学の英語教育に携わっています。全体的に日本の英語教育は様々な問題を抱えており、停滞しているというふうにも言っても過言ではないのですが、今回、この「手引」作成に携わることによって、いろいろと勉強する機会になりました。

それをどうやったら、むしろ日本語教育からの示唆が英語教育にもあるのではないかとということで、勉強しながら参加できたなというふうにも思っていて、自分の実践にもつなげていきたいですし、今後の日本語教育がどんなふうに変っていくのか、それがすごく楽しみだなと思っています。とてもいい「手引」ができたと思っています。ありがとうございました。

#### ○金委員

あっという間に1年間が過ぎようとしていて、自分でもびっくりしているのですが、この期間、委員の皆様、また、事務局の皆様といろいろ御相談できて、ここまで関わられたこと、まず感謝申し上げたいと思っております。個人的には、「日本語教育の参照枠」そのものについての理解が私自身も少しは進んだかなというふうに思いましたし、それをどのように使うかということを考えながら、分かっていたかのように伝える、伝えていく作業の中で最も私自身が学んだような気がしております。

もう一つは、今後期待を込めてなんですが、私は現在、韓国語も教えているわけですが、何かよりどころになるようなものを探そうとした場合、「日本語教育の参照枠」のような韓国語の何かがないかなというように感じて資料を探したり、自分がやっている現場と照らしたりしながら、うまくいっているのかなといった点検をしています。

「日本語教育の参照枠」やこの「手引」がそのように使っていただけるような日が来るといいな、そして、そのように何かお手伝いできることがあれば又努めていきたいというふうに改めて思いました。どうもありがとうございました。

#### ○佐藤委員

皆様に、まず、ありがとうございましたということをお伝えしたいと思っております。特に、先日頂いた資料、今回は最終の資料ですが、読み返していくごとに、第1章から第2章、第3章と、全体のつながりをしっかりと付けていただいた金先生、そして事務局の皆様も、大変難しい作業だっただろうなと思いつつ、好き勝手に後半部分で私は書かせていただきましたので、伸び伸びとさせていただきます。また、開発

したカリキュラムを実際に又見直す機会になりましたし、金委員からもありましたが、「日本語教育の参照枠」について深く理解を進めていくという機会にもなりました。1年間、どうもありがとうございました。

#### ○竹田委員

今回、自分の実践を振り返る機会を頂きまして、本当によい勉強になりました。ありがとうございました。今回、CDCに触れていただいたということで、言語だけでなく、様々な社会文化的なものまで目配りをしたような部分が入って、すごくうれしかったことと、そして、何か日本の国が一つの言語政策を持っていくという方向に動いていく大きな節目に関わることができて、本当に光栄でした。皆様、ありがとうございました。

#### ○平山委員

皆様、事務局の方、委員の方、ありがとうございました。私は就労のパートということで、就労の現場はJICEの現場以外にも本当にいろんなタイプの現場があるので、まずは日本語教育の関係者の方にこの事例を伝えることだけでも難しいなというふうに思っている中で、また、さらに今回、本当に私自身がここに参加させていただくことで勉強をする形になり、話を聞いているときにいろいろ新しい観点ができて、飲み込まれるように参加をしておりました。ただ、文字にして、「手引」という形にしていく、それを伝える作業を通して又学ぶ、金先生がおっしゃっていたように、正にそういう機会になっていて、是非これを読んだ人が、まず読んで学び、それを伝えるところまでいって、又学ぶというところまでどんどん発展していくとよいと思いました。これから先もこれをどんどん使って、伝えるということをもまず教師間でやり、それを又、企業の人なり、そういうふうにどんどん広げていかれるようなこともできたらと思います。せっかく関わらせていただいたので、そんなことを考えながら、今、振り返っておりました。本当に1年間ありがとうございました。

#### ○松井日本語教育専門職

ありがとうございました。本日の議事は全て終了となります。委員の皆様におかれましては、1年間にわたる精力的な審議本当にありがとうございました。

なお、本ワーキンググループの審議の成果につきましては、2月18日金曜日の日本語教育小委員会にて真嶋座長より御報告を頂きます。まだ日数等ございますので、細かい点で修正等がある場合は事務局にお知らせいただければ修正可能です。何か細かい点、字句の訂正等があれば、1週間程度時間がございますので、事務局の方にお知らせいただければと思います。

そのほか、御指摘いただきました、例えば事例ごとの初めの図表の示し方等々は幾つかパターンを作って、最終的には真嶋座長に御相談に乗っていただき、修正作業を進めていきたいと思っております。

そのほか、自己評価ツールと広報素材につきましても、頂いた御意見を受けまして作業を進めていきたいと思っております。こちらにつきましても、自己評価ツールの名称等々につきましても、真嶋座長に御相談に乗っていただきつつ、適宜皆様方にはメール等で御意見、御提案を頂きつつ作業を進めていきたいと思っておりますので、年度末まで引き続きよろしく願いいたします。

それでは、第5回「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループを閉会したいと思います。1年間にわたる御審議、本当にありがとうございました。

— 了 —